

ミュージカル座公演「カムイレラ」を見て

先週、光が丘のIMAホールで、ミュージカル「カムイレラ」を見ることが出来ました。「カムイ」とはアイヌ語の「神」、「レラ」とはアイヌ語の「風」の意味だそうです。

私は北海道のお土産の定番として、アイヌの人が彫った木彫りのクマ、トラピスト修道院のバター飴が懐かしく感じられる世代です。ですから木彫りのクマをいくつか持っていました。子どもの頃、♪ピリカ、ピリカ、タントシ、ピリカ、インナクル、ピリカ♪と、アイヌの歌として学校で習ったのでしょうか、意味も分からず歌ったことを今も覚えています。アイヌについてははっきりと意識したのは、金田一京助氏がアイヌ語を聞き取り調査し、保存に尽力したという話を聞き、文字を持たない民族は文化を伝承していくことが非常に困難だということを知った時でした。



そのような感覚しかなかった私でしたが、元タカラジェンヌの教え子が、現在も女優として活躍しておられ、この「カムイレラ」のお芝居の案内を下さったので、面白そうと思って出かけました。そして、アイヌの人々が日本の先住民族として、どのような過酷な境遇にあったかを始めて知りました。

アイヌは狩猟民族として 13 世紀に蝦夷と呼ばれていた北海道で共同体を形成し、独自の文化をもつようになったそうです。けれども 1789 年、幕府の方針のもと、松前藩による弾圧を受け、アイヌ独自の言葉も文化も奪われ、日本人に組み込まれてしまったのです。この時のアイヌの悲劇的な抵抗の姿をミュージカルで表現して、アイヌの生き方、祈り、魂を今に伝えようとした作品です。

大地、川、木々、生き物の中に神の命が宿っていることを感じ、大切にしてきたアイヌの人の心、長老を尊敬する気持ち、民族としての誇りを失いたくないという思いを描いています。「生き残って、アイヌの心を伝えて」と自らを犠牲にする人々、アイヌの人を守りたいと思う日本人も登場しました。

アイヌに私も無関心だったので、他人のことは言いにくいのですが、いまだに日本は単一民族だと言う政治家がいて驚きます。琉球民族、アイヌ民族、大和民族、朝鮮民族が日本の統治の中で、さまざまな形で、文化を作り上げてきたのではないかと思います。奪ったものも多かったと思います。今、人権を大事に考えるべき時ですし、多様性を喜び、異なる文化にも目を向けて、それぞれの個性を大切にしていきたいと思いました。それにしても、日本人は先住民に残酷だったと思わずにいられません。

北海道出身の「ゴジラ」のテーマ曲で有名な作曲家・伊福部昭氏が「素晴らしい音楽とは、外国の物まねではなく、民族の特殊性を通過して、人類の共通性へと到達したもの」であり、「土地の花」であると言っておられました。日本人の琴線に触れる音楽は、日本の風土から生まれたものだと言われました。そして彼の作品の一つ、シンフォニア・タプカーラの第三楽章を聞きました。その音楽は北海道のアイヌの音楽から生まれたと言っておられました。なんと、そのメロディは函館や樺太で暮らしたことがある祖母が歌ってくれた子守唄に似ていました。静かな、ゆったりとした、哀愁の漂う曲でした。

今回のミュージカルは音楽、音響の面で不満です。耳を聳る騒々しい、大音響、叫び声が残念でした。また、アイヌの人の貧しさを表現したかったのでしょうか、衣装がお粗末に見えました。北国の人々の衣装らしく、温かそうな感じがほしかったです。…アイヌの神の風がもっと吹いてもいいかな？